

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

46 トツカトツカからの贈り物

「はじめまして。わたくし、トツカトツカから参りましたメルーナでございます」

ちよつとだけ裕福な村の娘といったふぜいのその少女は、ちよこんと膝を折つてにこやかに言いました。籐で編んだかごからは、美味しそうなきのこが顔をのぞかせていました。

「ん、何の用かな。トツカトツカからのみつぎものを持って来たのか？」
何も知らないニーダマが言うと、かごにちらりと目をやりました。

「お、きのこか。私の好物ではないか！」

ニーダマは頬を緩め、ひざまずいたメルーナの差し出したかごを受け取ります。ふとニーダマが顔を上げると、メルーナの後ろには三人の男が控え、その横で母のレモンが微笑んでいました。

「母上、これは……？」

「気に入ったかい、ニーダマ？」

「きのこが……ですか？」

「ほっほっほ。お聴きかい？ 皆様がた。王様は面白いことを言う」

男たちはレモンにつられて笑い、メルーナは顔中を真っ赤にしてうつむきました。ニーダマはわけがわからずに、きのこのかごを脇に置きます。

「メルーナとやら、この母が何を笑っておるのか、私に教えてくれまいか」
ニーダマはにこやかに言います。メルーナはすつと立ち上がりニーダマのすぐ横まで歩み寄ると、真っ赤な顔をさらに赤くして、小さな声で言いました。

「わたくしのことを、あなた様の妃として気に入ったかと、おっしゃっているのでございます」

「何だと！」

急に大きな声を上げたニーダマに驚き、メルーナは怯えた顔を浮かべて後ずさりしました。

「母上、これはいったい!?」

レモンはそのにこやかな顔をもつと緩めて、言いました。

「お気に召したようだねえ。良かった良かった。私の目に狂いはないんだ。メルーナは素晴らしい妃になるだろうさ」

「ちよ、ちよつと待って……」

ニーダマがその言葉を言い終わらぬうちに、メルーナの従者たちが先を争うようにしてニーダマのもとへ駆け寄り、それぞれが持参したみつきものを矢継ぎ早に差し出しました。メルーナはにっこりと笑みを浮かべてみます。

わたしには心に決めた娘がいる。いや、もうその娘とわたしは夫婦なのだ、とニーダマは言いたかったのですが、あまりの勢いに押され、そしてひとりで勝手にどこの娘ともしれない娘を娶った引け目から、言葉を口にするのができませんでした。それより何より、メルーナという娘はまだほんの少女です。それに身なりからして、高貴な家のものとも思えません。適当にあしらっていけば、そのうち妃にすることなどあきらめさせられるだろうと、ニーダマは軽く考えていました。

でも、皆さんは知っていますよね。メルーナは高貴な家どころか、トツカトツカの国のれつきとした王女なのだということ。

〈つづく〉